

# シンポジウム「多文化共生社会の実現に向けて ——大学と地域の連携を考える——」

基調講演 「無国籍者と日本社会」

陳 天 璽

平成 28 年度の横浜国立大学重点化競争的経費事業として、国際社会科学研究院では法律系の教員を中心に都市イノベーション研究院、国際戦略推進機構の各教員とも連携して「国内のグローバル化に伴う外国人の支援と地域的連携の推進」を目的とする学内横断的プロジェクトを立ち上げた。

本事業は、グローバル新時代の大学教育の高度化・多様化への対応を中期目標に掲げる大学のスタンスのもと、横浜・神奈川に立地して人文・社会系学部と理工系学部が一つのキャンパスにあり、また多くの留学生が学ぶ大学の特色を活かし、文理融合と分野横断型教育・研究の追究及びグローバルな視座をもってローカルな課題に対応できる人材育成のための教育体制の整備をねらいとする。平成 28 年度の活動として、(1)本学と国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) との包括連携協定締結を受け、神奈川県「インドシナ・ユース」を対象に実施した社会統合の実態に関する共同調査、(2)国際戦略推進機構・日本語教育部によるデジタル・ストーリーテリング (DST) の手法を用いた県内中学校での多文化共生教育と外国人生徒への日本語教育、(3)神奈川県の外国人家事支援人材受入れに伴う法的問題の検討を目的としたフィリピン大使館労働部 (POLO) との共同研究会、(4)外国人住民をめぐる課題を学ぶための地域実践セミナーの実施等が挙げられるが、これらの総括として、平成 29 年 3 月 8 日に横浜

ランドマークタワーにおいてシンポジウム「多文化共生社会の実現に向けて——大学と地域の連携を考える——」を開催した。本稿は同シンポジウムの基調講演をお引き受け下さった早稲田大学国際学術院陳天璽教授の講演の記録である。  
〔常岡史子 横浜国立大学大学院国際社会科学研究院教授〕

## シンポジウム「多文化共生社会の実現に向けて ——大学と地域の連携を考える——」

日時 平成 29 年 3 月 8 日 (金) 13:00~18:00

場所 横浜ランドマークタワー 25 階

○総合司会 皆様、本日はお忙しい中お集まりくださいまして誠にありがとうございます。

これから、横浜国立大学の重点化競争的経費事業「国内のグローバル化に伴う外国人の支援と地域的連携の推進」プロジェクトの本年度の活動の総まとめとして、シンポジウム「多文化共生社会の実現に向けて——大学と地域の連携を考える——」を開始いたします。

私は横浜国立大学国際社会科学研究院の常岡と申します。本日司会を務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

横浜国立大学は、皆様も御存じのように神奈川県、横浜の地にあるということで、国際性ということを従来から言われてきましたが、真の国際性とは何なのか、国際化した地域社会にある大学としてどのような貢献ができるのかということを、私ども教員は、地域の皆様とも御一緒

に、これまでも色々な機会において考えてまいりました。ただ、従来は各自の活動がいずれも個々の教員の専門分野や研究関心ごとに分断された形で行われがちであったと思います。そこで本年度は3つの部局、国際社会科学研究院と教育人間科学部・都市イノベーション研究院、そして国際戦略推進機構の教員が集まって、共同で研究と教育の体制を構築しようということでプロジェクトを立ち上げ、本日のシンポジウムの開催に至ったということでございます。

このシンポジウムでは、個別の活動報告及び地域社会と多文化共生の問題に取り組んで来られたパネリストの方々によるディスカッションを行います。それらに先立ちまして、本日は早稲田大学国際学術院の陳天璽先生にお越しいただき、「無国籍者と日本社会」というテーマでお話をいただきます。

陳先生は、御存じの方もたくさんいらっしゃると思いますが、横浜の地で無国籍の問題について、御自身の御体験も踏まえながらこれまで多くの活動をされてきた方で、本日も忙しい中お話をいただけますことをありがたく思っております。

それでは、陳先生、どうぞよろしくお願いいたします。(拍手)

○陳教授 こんにちは。ただいま御紹介にあずかりました早稲田大学国際教養学部の陳と申します。

きょうは、生まれ育った横浜で、皆さんと一緒に多文化共生、そして、大学と地域との連携についてお話をさせていただく機会をちょうだいしまして、心から感謝しております。

いただいたお題が「無国籍者と日本社会」なので、そういったテーマをベースにお話をさせていただきたいと思います。

#### ◇無国籍となった私の生い立ち

既に御察しの方も多いかと思いますが、私は両親が中国本土の出身です。父は満州の時代を

経験し、その後、日本との戦争つまり第二次大戦後、中国の中で国民党と共産党の内戦がありました。父はその内乱をくぐり抜け中国から台湾に渡って、50年代、台湾で過ごしていました。

父は、日本の教育を受けていたということもあったので、その後、台湾から日本へ留学することを決めて、1954年来日し、1956年明治大学大学院に入学しました。1963年、台湾に残していた母や子供たちが父に沿う形で日本に居を移し、母も日本に来て今年で54年になります。私は6人兄弟ですが、末っ子の私だけが日本で生まれました。そんな私の家族や個人的な体験をきょうは皆様にも一緒に振り返っていただけたらと思っております。

私が生まれたのは1971年ですが、翌1972年に日中国交正常化、日華断交という外交関係の変容がありました。

そのときに、私たちの家族は中華民国籍、いわゆる台湾にある中華民国のパスポートを持って来日していたので、日本が中華民国を認めず、中華人民共和国を認めるようになるとの政策変更によって、私たちの日本での法的立場も変わるという状況に陥りました。

日本が共産党率いる中華人民共和国を認めるということによって、横浜をはじめ、日本に住んでいる華僑たちは、今持っている中華民国の国籍はどうしようかという問題に直面しました。中華人民共和国の国籍に変えようか、もしくは、日本国籍に変えようか。そんな中、家族は悩みました。父は満州では地主の出だったので、共産党に家族がつるし上げられるような経験をしました。一方、私の母方の祖父は国民党の将軍だったので国共内戦後、台湾に渡りました。そんな背景を有した私たち家族が選んだのは無国籍となるという選択だったのです。

私が生まれて一年足らずのことです。私が国籍を喪失したという証明書を自分がこの問題に向き合う中で見たのですが、その国籍喪失証明書上の私の写真は、タオルにくるまれた赤ちゃん姿でした。

それからずっと無国籍という身分が伴うことになりました。例えば、今でいう在留カード、つまり、日本に住んでいる外国人が持っている身分証明書に当たるものですが、私がかつて持っていた外国人登録証には「無国籍」の3文字が書いてありました。

#### ◇どの国にも入れない経験

父も母も非常に厳しく教育を重んじる親であり、「しっかりと中国人として胸を張って生きなさい」と躰けられました。うちは中華料理店を営んでいるのですが、中華街で育ったということもあり、しっかりと中国人であるというアイデンティティを小さいころから持って生きてきました。

幼稚園は山手にあるアメリカンスクールに通い、小学校は某有名私立の小学校で学ぼうとお受験をしたのですが、無国籍がゆえに入学できませんでした。父は「正々堂々と中国人として生きていきなさい」ということをモットーとしていたので、最終的に私は横浜中華街の中にある横濱中華學院に入学し、そこで中国語をベースにした教育を受けました。そして高校は日本の県立高校に転校し、日本の大学に進学しました。

自分が無国籍であるということに気づいたのは、小学校のころに台湾に行く際、出入国の身分証明書として再入国許可書というパスポートのような冊子を持たされたのですが、その国籍欄に「無国籍」と書かれていたためです。

中学時代、横濱中華學院でバレエ部に所属しており、バレエ部の遠征で台湾に渡るとき、入国審査の際に提出する書類に、再入国許可書に合わせ自分の国籍を「無国籍」と書いたために入国手続きが頓挫し、いろいろイミグレーションの人とやりとりしたのを覚えています。

特に、忘れられないのは、大学時代、たしか5月でした。4月に父と一緒に韓国での学会に参加した後、5月にフィリピンで陳氏宗親会といって、世界各国から陳の姓をもつ人が集まる

会合がフィリピンのマニラで行われるということで、父に招待状が届いていました。

私はその招待状を見て、「パパ、パパ、行こう！行こう！私、行きたい！」といました。父は「いや、ビザの手続きとか大変だから、行くのはやめよう」と消極的でした。

皆さんは、日本のパスポートを持っている人が多いかと推測しますが、いわゆる「強いパスポート」を持っている人はノービザでどこにでも行けるので、チケットさえ買えば、あとはホテルを手配するぐらいで海外旅行の準備が完了すると思います。しかし、私たちのように無国籍の場合は、行く前に目的国の大使館に行ってビザを取らなければいけないのです。そのためにいろいろな書類をそろえないとビザ取得の申請もできません。一方、住んでいる日本に帰ってくるための再入国ビザも取らなければいけないのです。例えば、旅が4日間だとしても、観光ビザ取得のためだけで準備期間が2週間も3週間もかかります。

ビザ取得のため、銀行残高証明書であったり、健康診断書であったり、在学証明書であったり、その国に行ったら絶対帰ってくる、つまり行ってそのまま残って不法滞在する人ではないということを裏付ける書類、そして、日本に生活の基盤があり、絶対に帰ってくるということを証明するような書類を全てそろえないと、ビザの許可が下りなかったのです。

フィリピン行きのビザを私が責任をもって準備するからと両親を説得し、ようやくビザを取得しマニラに行きました。会合は3-4日間でした。日本に帰る前日に、母が「ちょっと台湾に寄って、お兄ちゃんに会ってから帰らない？」と提案しました。私は6人兄弟で、姉が2人、そして兄が3人いるのですが、当時、兄が日本の大手建築会社の駐在員として台湾に住んでいたため、母が「お兄ちゃんに会いたいし、ちょうど中華航空で台湾経由だし、いいんじゃない？」と予定を変更しました。

私たちからすると「台湾に帰る」という感

覚なんですよね。台湾に到着し、入国しようとしたときに、父と母はそのまま入ることができたのですが、私が入国審査手続きをする<sup>フシン</sup>と、審査官が「不行<sup>フシン</sup>、不行<sup>フシン</sup>（意識：だめ、だめ）」と。「えっ？ どうしてですか」と訊くと、「あなたはビザがないから」といわれ入国拒否されたのです。

私からすると、「自分の国に帰るだけなのに、どうして？」と思ったのですが、「いや、あなたは華僑です。だからビザがないと入れない」といって、入れてくれなかったのです。

イミグレーションのブース越しから、母に、「媽（お母さん）、入れないって！」と叫んだら、母が「あっそう、じゃあお姉ちゃんに電話しとくから」といって、父と母はそのまま台湾に入り、私はボーダーを越えられずターミナルに戻って、フライトを変えて一人羽田に帰りました。

そのとき、羽田発着の国際線フライトは中華航空だけで、他の国際線は成田空港に移っていました。羽田に帰るフライトを数時間も待って、ようやく日本に着いたとき、すでにクタクタだったので、はやく家に帰って休みたいと思い、入国審査の列に急ぎました。審査官に身分証を提出すると、「後ろのベンチで待ってなさい」といわれたのです。「どうしてですか」と訊いたら、「とにかく、ちょっと待ってなさい」といわれて、嫌な雰囲気が漂いました。

しばらくすると、いかにも見た目に怪しい感じの人たちが一人また一人と増え、私も含めお互い何もいわないのですが、「あなた、何かいけないことを企んでる人？」というようなことを目で探りあっていました。

「最初の方」と呼ばれ、私は別室に連れて行かれ、そこでいわれたのが、「もう日本には入れないので、今から台湾に帰ってください」との一言。私が「えっ？ どういうことですか」といっても、「もうあなたは日本に入れないので、台湾に帰りなさい」との一点張り。

「私、今、台湾に帰れなくて、だから日本に

帰ってきたんです。しかも、私の家は横浜にあるんです。中華街に住んでいます」と主張しました。「いや、そういわれても、もうあなたは日本に入れません」と。

外国人登録証を出して、「永住者なんですけど」といっても、「永住者でも、再入国ビザを取らずに出て行ったら、その永住資格も放棄したと見なしますので、もうあなたは日本に入れません」といわれたのです。

そのときに初めて、私の「無国籍」とはこういうことなんだと肌で感じました。鳥肌が立つほどでした。それまでは身分証明書に書かれている「無国籍」の意味を理解していませんでした。

「私と日本との関係、もしくは、私と台湾との関係もこの紙切れによって位置づけられるのか・・・」。「生きてきた毎日、積み重ねてきた日常をこんな紙切れで否定されるのか・・・」と虚しさを感じました。

#### ◇社会での差別の経験

そのときから私は、無国籍であることを隠すようになりました。大学時代、自分が持っている外国人登録証を他人に見られないようにしました。なぜなら、自分がどう判断されるかわからないという恐れがあったのだと思います。

実際、大学時代にアパートを借りるときも、身分証明書に「無国籍」と書いてあるので、それで差別を受け、アパートの大家さんに「ちょっとこの方は・・・」と入居に難色をしめされた経験もあります。

銀行のクレジットカードの契約をしたときにも、「無国籍ってどういうことですか？」と連絡がありました。そういった経験をしたので、就職活動は怖くてできませんでした。履歴書の本籍欄に、私の場合は「無国籍」と書くことになってしまいます。そうすると、就職差別を受けるだろうから、就職ではなく進学の道を選びました。

でも、進学すると金銭的にも親に迷惑をかけ



るし、無国籍だと申請できる奨学金がなかなかなかったので、進学も悩みました。しかし、父と母がしてくれたのは、「お金のことは心配せず、あなたは進学しなさい。教育を受けなさい。なぜならば、教育というのが一番の財産だから。あなたの中に宿る財産であって、誰も盗みとることはできない。一方、お金などの財産があっても、それはだまし取られたり、使ってなくなる日が来る。教育という財産だけは誰にも取られず、場合によってはもっともっと大きく開花する。だから、家の財政は心配しないでいい。知識、教養をしっかりと身に着けること。それがあなたの財産です」といって、背中を押してくれました。

筑波大学大学院に進学し、大学院時代は香港中文大学に留学しました。なぜ香港に行ったかという、香港に行けば私はマイノリティでなくてマジョリティになれると思ったからです。中国系の社会に行けば、私はマイノリティとして差別されるのを恐れることなく生活できると思ったのです。しかし、香港では「中国語うまいですね」といわれ、日本人扱いされました。「日本から来た陳さん、中国語うまいでしょ」と紹介されるのです。その方に悪気はなく、素直な気持ちで紹介してくださったと思うのですが、そのころの私には、まだそれをプラスに受け入れるだけの強さがありませんでした。

「人種差別がなく、自由なところに行きたい」と思ってアメリカに渡りました。本当にそうなのかどうかはわかりませんが、「人種のるつぼ」といわれ、今のトランプ政権とは違い、当時のアメリカは他国と比べれば移民に寛容な政策を施していたからです。

将来、国を越えるような仕事に就きたい。国籍とか、国家とか、そういったものに惑わされないで働けるような人生を送りたいと思って、国連を目指しました。でも、結局、私が無国籍で、国連加盟国の国籍がないがゆえに、国連への就職も実現しませんでした。

「ああ、現実ってこんなに厳しいんだ・・・

志を持っていても、目の前の壁は絶えない。人生そんなものなのか」と思いました。ニューヨークの国連での面接の後に、各国の旗がなびいている横で肩を落として歩いた帰り道、私は無国籍を避けては生きていけないと思いました。その後、博士論文を終え、自分の無国籍の問題に向き合うと決心し、アメリカから日本に戻って父にインタビューをしました。

父はいわゆるコスモポリタンなんです。「国を越えて生きなさい」ということなんですよ、きっと。父は日本で事業を展開していたし、実際、彼の人生を振り返ると、自分とは変わらなくとも、国民を統治する政府自体が政治や戦争によって変わる経験をくり抜けてきたので、ある意味達観していたのだと思います。私は既に国家というものが成立した、混乱の少ない戦後の時代しか経験してないので、まだそういった感覚を身につけるのに努力が必要でした。

その後、無国籍の問題に向き合うようになって、アメリカではよく他人に「Where are you from?」ときかれるのですが、そのときに、「I'm stateless (私は無国籍です)」というようにしました。すると、みんなが「えっ、無国籍?」と食いついてきたのです。「これは面白いかも」と思って、むしろそれをきっかけに友達をつくったり、無国籍の証明書を出して見せたりしました。多くの日本から来ていた友達も「えっ、日本に無国籍の人がいるの?」という反応をしました。そうした経験を経て、無国籍の研究をするようになり、いまでは、皆さんにこうして無国籍について話ができるようになりました。

#### ◇無国籍者のイメージ

さて、皆さん、無国籍とって連想するのは何ですか。少し考えてみてください。

実は、数日前、ゆっくり静かにしていたかったので、山下公園に行き散歩後、欄干の上に座って海を眺めていたんです。すると、男性が私のところにきて、なにかいいました。私はイ

ヤホンをしていたので聞こえなかったもので、返事をせずにいたら、今度は中国語で「あなたは中国人ですか？」と聞くのです。私は例のごとく、「私、無国籍です」と返答したら、どうしたと思いますか？彼は、両手首をくっ付けて手錠をはめたジェスチャーをして、「これ？」って。私は、非常に悲しい気持ちになりました。でも、多くの方は、まだそういった認識なのでしょう。「無国籍＝法を犯している人」というようなイメージなのですね。その間違った先入観を私は変えたいです。

国籍といったときに、アイデンティティとか、パスポートとか、身分証明書、国家の法的な帰属など、いろいろ連想しますが、現代社会において、国籍とは国家と個人を結びつける法的な紐帯です。国籍は、多くの場合、生まれたときに決まります。出生地主義の国に生まれれば生まれたところの国籍が与えられますし、血統主義の国、例えば日本や中国であれば、親が何国籍かによってその子の国籍が決まってきます。しかし、現在のようにグローバル化した社会で、人の移動が激しくなるなか、当然重国籍になる人もいれば、無国籍になる人もいます。「法を犯した人」と連想するのは稚拙です。むしろ法や制度が遅れており、人の複雑な動きに追いついていけないのです。

無国籍ネットワークで、今朝受けた法律相談ですが、難民の方が日本で子供を生んだとのこと。相手(子の父)は観光客だったのです。「その方との間に生まれた自分の子は、国籍がないので助けてほしい」という相談でした。人の激しい動きに伴い、さまざまなケースが発生していることが分かります。

国籍よりも人ありきのはずですが、なぜか現代社会は、国籍、その人が何人なのかとカテゴリー分けしないと安心できないようですね。敢えてここでは、みなさんと一緒に国籍のはざまにいる人であったり、外国籍を有して日本で育っている人であったり、いろいろなケースの無国籍者を通して、国家、社会、そして世界を

見ていきたいと思います。

#### ◇日本や世界にはどれくらい無国籍者がいるのか？

現在、日本においても、私が有していたように身分証明書(在留カード)に「無国籍」と明記されている人は600人ほどいます。しかし、事実上無国籍になっている人、ということか、日本が発行する身分証明書にはベトナム籍とか、ミャンマー籍とか、朝鮮籍などと書いてあるのですが、それらの国に登録されていない人は実はもっとたくさんいらっしゃるのです。

「自分はベトナム籍です。大学のサークルのボランティア活動で海外に行こうと思っているのですが、ベトナムパスポートが入手できません。どうしたらいいですか」という相談を受けことがあります。日本の身分証明書上ベトナム籍となっているのですが、事実上、無国籍状態となっている人たちです。そういった方たちが実は、日本にはたくさん住んでいます。日本には、無国籍の人を見分ける制度がありません。実際、無国籍の人がどれだけいるかというのがわからない状況にあります。

また、出生届が出されていない子供たちもいます。そういった書類がない人の数は、なかなか把握できません。

無国籍者が世界にどれくらいいるのかについては、国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)の調査によれば、1,000万人ほどと推計されています。国々の政治変動によって無国籍になる人もいれば、領土の所有権の変動、例えば、ソ連崩壊後、各国が独立しました。エストニア、リトアニアなどが独立し、その国に住んでいたロシア人が、「こんな弟分の国の国民になんかならない、国籍は取らない」ということで、ソビエト国籍のままでおり、ついには無国籍になったという方もいるそうです。

他にも、政府の差別的な慣行や政策であったり、国籍を離脱して新しい国籍を取得できない人であったり。あとは、アメラジアンと呼ばれ

氏名	陳 天 璽	昭和	日生
本籍	無国籍		
住所	横浜市中区山下		
交付	平成10年08月12日06407		
平成15年の誕生日まで有効			
免許の 条件等	<div style="display: flex; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">優良</div> <div style="margin-left: 10px;">             番号 第 459002737911 号              二種 平成00年00月00日 種 普通              他 平成02年03月16日 類              二種 平成00年00月00日           </div> </div>		
運転免許証			 神奈川県 公安委員会

写真 1



写真 2

る人たちのように「国籍法の抵触」によって無国籍となるケースです。アメリカ国籍の男性と日本国籍の女性との間に沖縄で生まれた多くの子供たちがその一例です。アメリカは生地主義、1985年以前の日本は父系血統主義なので、日本人のお母さんから生まれても子に日本国籍は与えられない。アメリカは生地主義なので、日本で生まれた子には米国籍は与えないということで、無国籍になった子がいました。

1980年代バブル以降は、日本人のお父さんと外国人のお母さんとの間に生まれた子で、お母さんとお父さんが正式に結婚をしておらず、またお母さんの在留期限（ビザ）が超過しオーバーステイになってしまった場合、オーバース

テイが知られ強制送還になるのを恐れ、子が生まれても役所に届け出ないケースがありました。その子どもたちが、今はもう高校生や大学生になっており、いろいろな問題に直面しています。このように、さまざまな原因で無国籍になる人がおり、抱える問題やアイデンティティも人それぞれです。

#### ◇身分証明と無国籍

写真1は、私の運転免許証です。本籍の欄に「無国籍」と明記されています。

写真2は、私が海外に行くときに持っていたさまざまなパスポートです。真ん中の冊子は台湾が発行するパスポートです。先ほどご紹介し



写真3

たように、これを持って台湾に行っても、ビザがないために入ることができませんでした。

右側の冊子は、中華人民共和国が発行している旅行証。そして、左側の水色の冊子は、香港に入る際に必要となる入境許可証です。私がかつて香港留学の準備をしていた1994年は返還前だったので、イギリス大使館に行って香港行きのビザ申請をし、48時間のトランジットビザを取得するのに1週間イギリス大使館に通い詰めたのを覚えています。「この書類が足りない、あの書類が足りない」と本当に面倒でした。

次に、写真3の茶色い冊子が、先ほど話した再入国許可書です。この中に、私の国籍は「無国籍」と書いてありました。日本に再入国するときにこの書類が必要でした。

現在では、在日外国人の再入国の手続きは大変簡易化されました。しかし、パスポートを持っていない人は、この再入国許可書で出入国しています。

今日、話した内容は、『無国籍』（新潮文庫）に書いてあるので、そちらをごらんください。ちなみに本の表紙にある写真は、私が無国籍に

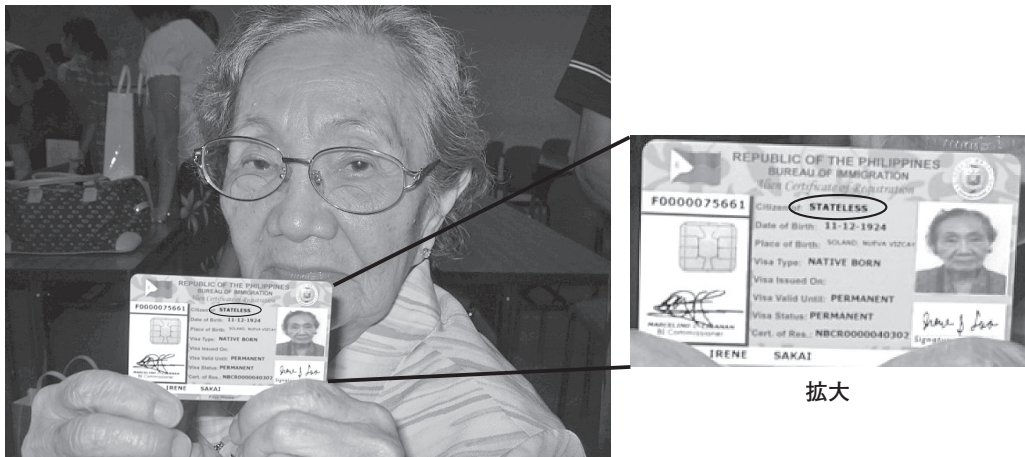
なった頃に撮った家族写真です。

#### ◇さまざまなケース

無国籍といっても、本当にさまざまなケースがあります。国籍法の抵触により発生する無国籍、行政処理の不備によって発生する無国籍、そして文化的な意識の違いで発生する無国籍など。たとえば、お金を払って偽造書類をつくってもらえるような国の方であれば、そうしたことが横行しているので、あまり行政処理をしつかり行わない場合があります。いくつか具体例を紹介します。

さきほど触れたアメラジアン（JFC: Japanese-Filipino Children）とって、日本人とフィリピン人との間に生まれた子どもがいます。私は、JFCを戦前版と現代版とって分けています。現代版は先ほど話したように、バブル期、ダンサーやシンガーとして来日したフィリピン人の女性と日本人男性の間に生まれた子どもたちです。戦前版というのは、日本が貧しくて、移民を送り出していた時代、フィリピンに渡って、現地の女性と結婚することによ





拡大

写真 4

うやく土地が得られ、アバカ栽培など農業に従事し、生きる術を手にすることができた日本の移民がたくさんいました。そういった移民の人たちは、第二次世界大戦でフィリピンは戦勝国、日本は敗戦国となり、日本に帰ってくる船に乗れるのは15歳以上の男性だけだったそうです。そのころ、フィリピンに残ったほうが食べ物は豊富にあるので、「いつか迎えに来るから」というお父さんと別れてフィリピンに残った子どもがいます。その人たちが戦前版JFCです。その人たちの中に、フィリピンで無国籍になっている方がいます。なかには、今になって日本に戸籍を探しに帰ってきている人たちもいます。

写真4は、サカイさんという方で、お父さんが日本移民です。彼女はフィリピンで生まれた、いわゆる戦前版JFCです。彼女の身分証明書にははっきり stateless と書いとあります。彼女は、NPO法人フィリピン日系人リーガルサポートセンターの支援の下、お父さんの戸籍を探すため来日しました。何か手がかりを見つかることができれば、彼女が日本国籍を取得する可能性も生まれます。

しかし、戦後、フィリピンにいた日本の方たちは差別を受けました。「ハボン、ハボン」と

からかわれたので、できるだけ日本と関連するようなものは燃やし、日本人であることを隠して暮らしていた人も少なくなかった様です。そのため、なかなか身分を証明する証拠書類がないのです。

現代版JFCのケースとして、私がドキュメンタリー取材の際に会った子を紹介します。お父さんは日本の方で、お母さんがフィリピンの方です。両親は婚姻届けを出しておらず、二人の間に生まれた彼女の出生届も出されませんでした。両親は離別し彼女はお母さんと育ちました。バブル経済が弾けた後、日本ではオーバーステイ外国人の摘発が厳しくなり、そのころに、お母さんがオーバーステイで摘発され強制送還されることになりました。彼女は何の身分証もなく、母の強制送還にともない、彼女に一枚の渡航許可証が発行されフィリピンに送られました。

写真5は、日本の幼稚園の運動会のときの写真です。そして、写真6は彼女がフィリピンに渡ってから2年後、私たちがフィリピンへ彼女を取材に行ったときの写真です。クラスメイトたちに「日本語、本当にできるんだ」といわれていました。

次に、事実上無国籍状態となっている難民2



写真5



写真6

世のケースです。神奈川県にいらっしゃる皆さんなら、難民2世のサポートをしている方も多いかと思います。先ほども話したように、日本が発行する証明書には、例えばベトナム籍、ミャンマー籍、カンボジア籍と書いてあるのに、その国では登録されていない、いわゆる事実上無国籍となっている難民2世の子供たちがいます。今では3世も生まれているかと思います。

以前、相談があった方はインドシナ難民2世で、両親が日本に来る前に香港の難民キャンプ

で生活し、香港で彼女を出産し3歳の頃に一家そろって来日しました。彼女の場合、どんな相談だったかという、「婚姻届を出したいのですが、出せません。どうしたらいいですか」という相談でした。相手は日本人の男性です。日本では、外国人が日本人と結婚する場合、独身証明書が必要になります。

彼女たちが婚姻届を出しに行った際、「独身証明書を提出してください」と役所の人にいわれ、彼女はベトナム領事館に行ったそうです。しかし、ベトナム領事館は独身証明を発行

するために「パスポートなどベトナムの身分証明書を出しなさい」と要求。彼女は、日本の在留カードを出しました。すると領事館の職員は「いや、これは日本が発行しているものだから、そこにベトナム国籍と書いてあってもダメ。ベトナム政府が発行した身分証明書を出しなさい」といったそうです。彼女の手元には日本が発行した身分証明しかなく、困り果てました。二人の間に、そろそろ子供が生まれるので、体調を整え無事に子を産むことに専念し、二人は生前認知など法律を調べる術もなく、まずは、彼女の私生児として子の出生届けを出しました。すると、赤ちゃんは彼女と同じように日本でベトナム国籍と登録されました。つまり難民3世、この場合も事実上無国籍です。

ひと段落着いた後、婚姻届けや子の登録など、どうかしたいと再度相談がありました。こういったケースは多数発生しており、前例に倣い、そういう場合は「自分はいつ日本に来て、どこで育ち、どんな教育を受けたかなど具体的な経歴を書き、一度も結婚したことはなく独身です」という陳述書を書いて提出すれば許可してもらえるかとアドバイスしました。ところが、彼女が行った区役所は「それでも、だめだ」の一点張りで、婚姻届けを受け付けてもらえなかったのです。二人は、旦那さんが住んでいる隣町の役所に行って、同じように陳述書を提出してみました。すると、なんと隣町の区役所の職員は親身に話を聞いてくれ、「やってみましょう」と陳述書が受理され、審査後婚姻が認められたのです。のちに、家庭裁判所での手続きを経て子は父の戸籍に入り日本国籍も認められました。

このケースからわかることは、役所の職員に、身分証の齟齬つまり事実上の無国籍についての知識があるかどうか問われること、また、職員の人柄つまり親身になって考えてくれる人かどうかによって、生まれて来る子や当事者の人生が大きく左右されるということです。

次のケースは難民2世のシャンカイさんのケース<sup>1)</sup>です。お父さんとお母さんがミャン

マーの少数民族で、両親は政治混乱のなか故郷を離れ来日しました。しかし、日本では難民認定されず、在留資格がないまま日本に暮らすことになってしまいました。シャンカイさんは1993年新宿で生まれ、生まれた当初の身分証には無国籍とあったそうです。彼が中学一年になる頃、両親とともに在留特別許可を取得し、その際に発行された身分証にはミャンマー国籍となっていました。しかし、シャンカイさんはミャンマー政府に国民登録されておらず、いわば無国籍状態にあります。

中学生の頃、両親と一緒に韓国へ観光旅行に出かけました。パスポートをもっていない一家三人は、再入国許可書というトラベルドキュメントで海外渡航しました。韓国に入国しようとした際、いろいろと取り調べを受け、2泊3日ほどの短い旅行にも拘わらず半日はほとんど入国審査に時間を費やし、とても肩身の狭い思いをしたそうです。それがトラウマになってか、大学でも留学を必須とする学部は諦め、いまでも海外に行くことに抵抗があるそうです。彼は、大学時代、勉強の傍ら「食」を通じた難民支援と難民の認知啓発を目指す「Meal for Refugees」というプロジェクトを立ち上げ、代表として活躍してきました。シャンカイさんは、いろいろな言葉ができ、社交性もあり、コミュニケーション能力が高い青年ですが、法的な制約がゆえに、社会は彼の能力を十分活用できていないと感じます。

次は、ベトナムからタイに渡った難民2世のケースをご紹介します。タイでは日本にいるベトナム難民と類似し、現地で制約された生活をしている人たちがいました。彼らは差別された社会から脱し、よりよい生活を求めました。なかには偽造パスポートを入手し、日本に出稼ぎに来た人もいました。日本でオー

1) テュアン・シャンカイ「無国籍を生きる私」『法学セミナー』2014年10月号、日本評論社、44頁。





写真7



写真8

バーステイとなり、逮捕され強制送還されることになったときに問題が起きました。強制送還先の問題です。原則国籍国に送還するのが入管の規定ですが、無国籍の場合、そもそもどこに送還するかが問題となるのです。

そういった方たちの問題を解決するため、弁護士や研究者、タイ研究の専門家たちが協力しました。無国籍の問題は、国を越えた問題であるため日本だけではなくタイ側の弁護士や研究者などとも連携しました。写真7は、北タイにあるベトナム難民が多く住むコミュニティを訪問した時の写真です。

タイ在住のベトナム人協会で交流中、一人のおじいさんが「うちの息子は日本に行って25年になるのだけど、全然帰ってこないんだ・・・」とこぼしました。日本から行った弁護士が「日本で何かあったらお手伝いできるかもしれないので、電話ください」と名刺を渡しました。後日、その方の息子さんから弁護士に電話があり相談を受けました。息子さんは来日後、オーバーステイとなり、あらゆる政府機関から距離をおき身を隠すように生活していたのです。

同じような立場の人は少なくなく、なかには、在留資格がないので健康保険に加入できず、病院へ行きたくても自費では多額の費用がかかるので行けず、体調不良を訴えたときには、末期がんを患っていたという人もいます。最後に一目家族に会いたいということで、帰国の支援を日本とタイの支援者でしたこともありました。その方の帰国の支援をする中、実は、タイの法制度が変わり、その方はすでにタイ国籍を取得できることが分かったのです。制度が変わり権利が得られることになっても、制限された立場にいと、なかなか情報にアクセスできず、知らないままでおり、得られるはずの権利を享受できないでいることがあることが分かります。それは、場合によって、命にもかかわる結果となりかねないのです。

写真8の方は、白系ロシア人のエフゲーニー・アクショーフさんで、私が敬愛する方です。2014年に亡くなってしまったのですが、彼は70年ほど無国籍のまま生きてきた方です。プーチン首相も彼をロシアに招待することが多く、「プーチンさんに、ロシア国籍を与えるよ」といわれたそうです。私も「アクショーフさ





写真 9



写真 10

ん、日本国籍に帰化しないんですか？」と訊いたことがあります。「うーん、いいの。私は無国籍が合ってるから、無国籍だから自分らしい」といていたのを今でも忘れられません。国籍で自分のことは規定できないということなのでしょう。

写真9は私の大好きな母です。彼女が手にしている身分証明書ですが、上は外国人登録証で、下が在留カードです。2012年7月に制度改正があり、外国人登録証から在留カードに切りかわったときに、母と一緒に入管に行き、カードの切りかえをしました。

はじめにも触れたように、私たちの家族は中華民国国籍だったのですが、1972年、外交関係の変動によって無国籍となりました。それから40年後の2012年、母の身分証明の更新に行ったら、証明書上の国籍・地域欄の記載が、

無国籍から台湾に変わったのです。

私は、国籍・地域欄を指さし入管の職員に聞きました。「これ、どういうことですか。どうして無国籍だったのが台湾に変わるのですか？」と。すると職員は「国籍・地域欄の記載は所持するパスポートを根拠とします」といいました。

ちょうど、在留カードへの制度変更を機に、法務省は、国籍・地域欄のカテゴリーとして、パレスチナと一緒に、台湾というカテゴリーを増やしたのです。よって、母の在留カードに「台湾」と記載されるようになったということです。

腑に落ちない私に、母は「いいの、いいの、何でも。もう私は80過ぎなんだから」といって、そのまま帰路につきました。

その数週間後、私は、難民2世の方たちの在



写真 11

留カードへの更新に同行しました。神奈川在住の方で、1人はカンボジアの方、もう1人はベトナムの方です。

彼らは、パスポートがなく、再入国許可書しかないで、「彼らの場合は、どうなるのだろう?」と思いながら、一緒に手続きに行きました。

さて、彼らは、どうなったと思いますか?

「パスポートがないので、在留カード上、無国籍と登録されるのかな?」「もしくは不明とされるのかな?」という推測していたのですが、彼らの場合、パスポートがないにもかかわらず、在留カード上も以前同様ベトナム、カンボジアと記載されたのです。まさに、ダブルスタンダードです。母と彼らの在留カードへの切りかえの一件で、身分証明書に書かれている国籍など、制度の恣意性に気づきました。身分証明上の各種情報は「神聖な証明として」使われますが、あまり当てにならないものだなあと実感しました。

#### ◇無国籍者から世界を見る

このように無国籍者から世界を照らし返す

と、実はいろいろなことが見えてきます。「人は誰でも国籍を有する権利がある」という。そして、国籍をもって人はどんな権利を得られるかが決まるのですが、実は、そうした制度や法には穴やズレがあったり、見えないところに隠れた捻じれが存在していることが、無国籍の人たちに密着し参与観察していると気づかされます。

現在、無国籍ネットワークというNPO法人を運営していますが、そこでは、無国籍の人たちの法的な相談のほか、同じ無国籍の人たちがいるということを知ってもらい、無国籍者の拠り所になることを目標にしています。そして、より多くの人に、無国籍の人が法を犯した人ではなく、しっかりと生きている人たちがいることを知ってもらうための啓発活動もしています。

国連では、2014年より「無国籍を撲滅しよう」というキャンペーンを始めました。無国籍ネットワークの場合は、撲滅するというよりも、むしろより多くの人に無国籍者を正確に知り、国籍のあり方、社会で無国籍者とのつき合い方はどうあるべきかを再考してもらうことをモッ





かり寄り添い、理解し、思っていること、考えていること、困っていることを知るのには、非常に大切ではないかと思います。

無国籍であっても一定の地位と権利を享受できる社会であるべきです。当事者はもちろん、理解ある支援者を育てるべく、大学などの教育機関をはじめ、NGO 団体や地域と連携していくことができればと思います。

実は、私の母が1週間前に他界しました。そのため、きょうは失礼ですが黒い服を着ています。母は私と普段はいつも中国語を話すのですが、最期を一緒に過ごしていたときは、なぜか日本語ばかりでした。「痛い」とか、「お水」とか。最後の最後に言ってくれたのは「ありがとう」で、日本語ばかりなのです、不思議なことに。「どうしてかなー」と思っていました。

国籍といえば、今は移民政策であったり、ヨーロッパで起きていること、アメリカで起きていることなど、本当にいろいろなことが、国籍で人をカテゴライズし、「この人はこうだ」と色分けするような世界になっています。しかし、実はそんなものであるべきでないはずです。

母の身分証上の国籍は、政府間の外交関係、制度や政策の変更で何度も変わりました。母は、中国も愛していましたし、台湾も愛していた、そして、日本も本当に愛していたんだなあと、最期の数日を一緒に過ごしていて、心の底から実感しました。

彼女は全てうまくアレンジしてくれ、今日、私がここで皆さんと過ごすことができるようス

ケジュールも調整してくれました。葬儀など、きのうでひと段落し、きょうこのシンポジウムに参加できたのも、母が「あなたはちゃんと自分のやるべきことをしなさい。そして、日本の皆さんに、無国籍の実状を伝え、社会の人たちがどういうふうに生きていくべきか、そして、グローバルに生きていくにはどうすればいいのかわかりと伝えてきなさい」と天国からメッセージをくれたように思います。

なので、今日はこういった機会を皆さんと共有することができて、本当に光栄に思います。そして、これからも一緒にグローバルな人材を育てられるような社会を築いていき、そして、そういった実践をしていけたらと思います。

長くなりましたが、ご清聴ありがとうございました。(拍手)

○総合司会 陳先生、誠にありがとうございました。

お母様のこと、私たちも一昨日初めておうかがいして、本来ならば本日陳先生においでいただくのは控えるべきと思ったのですが、今お話し下さいましたように、お母様が陳先生にここに来るように采配くださったとおっしゃって下さいましたので、そのお気持ちに甘え、予定どおり基調講演を行わせていただきました。

改めてお礼を申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。

[ちん てんじ 早稲田大学国際学術院教授]